

教育改革フォーラムを実施して

機械工学科 萩原芳彦

1. はじめに

表題のフォーラムは、後に示すプログラムのよう
平成5年10月20日(水), 13:30~16:00, 古浜学長
はじめ約70名の教職員と10名の学生が参加して教務委
員会主催の下で行われたものである。本フォーラム実
施に際し、教務委員会に小委員会(海老原, 多留, 安
田, 萩原)が設置され、筆者はそのまとめ役であった
関係でここに報告する。

なお、フォーラムは6名の講師による話題提供なら
びに参加教職員・学生による自由討論の形でなされた。
以下に実施の経緯と討論の要点を述べ、最後に話題提
供者より提出された講演要旨を掲載する。特に討論は
活発に行われたものの、そのまとめはかなり難しく、
また、筆者の誤解している点、見落とした点があるか
もしれないがご容赦願いたい。

プログラム

- テーマ 主題 教育を考える
副題 授業改善と評価
日時: 平成5年10月20日(水)
13:30~16:00
場所: 123教室
- 総合司会 教務委員 萩原芳彦
開会のあいさつ 教務委員長 伊藤泰郎
話題提供
司会 教務委員 安田忠郎
- 学生による授業評価の事例発表
1. 学生による授業評価の実施例
機械工学科 教務委員 萩原芳彦
 2. 「電気回路理論および同演習」に関する
授業方法の自己評価
電気電子工学科 教務委員 海老原大樹
- 授業改善および評価への意見と提言
1. 授業改善および評価への提言
経営工学科 富田久雄
 2. 授業改善と評価について感じていること
自然科学系物理 鳥山 保

3. 授業改善および学生による教授法評価への
意見と提言

人文社会科学系 藤原洋二

4. 学生による授業評価について

土木工学科 星谷 勝

討論

閉会のあいさつ

教務委員 多留康矩

2. 実施の経緯

教育環境の変化, 18才人口の増加から減少への転換
など, ここ数年大学教育に関して実質的な大きな変革
期を迎え, 国レベルでは大学設置基準の大綱化がなさ
れ, また本学においては古浜学長指導のもと, 91学
長方針を起点として種々の検討が各部署においてなさ
れてきた。

教務委員会に対してもその一貫として, カリキュ
ラム編成方針検討依頼がなされ, 平成4年3月その答申
がなされた。これに沿って本学教育の見直しも暫時的
なされ, また各学科において検討されたカリキュラム改
定も教務委員会における議論を経ておおむね全学的に
統一性のあるものとなり, 昨年4月から実施された。
しかしながら, 本学の教育目標として設定された種々
項目の具体的な実施方法などについては完全に結論が
得られたわけではなく, 今後十分検討の上, 実行に移
す事柄も多々残されてしまったのも事実である。

このような状況のもと, 今後の本学の教育に関する
多方面にわたる改善について教務委員会としてどのよ
うなことをなすべきかを検討することが必要であると
考えられ, その際, 広く本学を構成している教職員・
学生が互いに意見交換する場を設け, 議論することな
ども意義あるとの結論に達し, 前伊藤教務委員長の下,
表記のフォーラム開催の運びとなった。特に, 今回は
最近大学関係者の間で話題となっている「授業改善と
評価」について取り上げることとした。

3. フォーラムにおける主な話題, 意見

まず, 伊藤教務委員長より, 上記の開催に至る経緯

に関することを含み、特に授業改善と評価など教育効果を上げることに限らず、各教員が上からの命令として受け止めるのではなく、自主的に実行し、教育年報や本フォーラムのような機会に発表し、互いに研鑽しあうことが必要であること、また本企画のようなことは継続して実施する必要があることなどを述べた開会の挨拶があり、司会の安田教務委員より本会は本音で話をしたい旨の説明の後、プログラムに沿って発表および自由討論がなされた。

以下にその要点を示す。

まず、教務委員会側から話題提供の意味で、萩原、海老原両委員が具体的な例を含めて、今回のフォーラムでの主題である、“授業改善と評価”に関する事例発表が行われた。これらの要点は本文末に示してあるので参考にさせていただきたい。

続いて、予め教務委員会より話題提供をお願い致していた、富田、鳥山、藤原、星谷の各教員から、授業評価の是非に関するご意見を披露していただいた。これらの方々のご意見の要旨も本文末に掲載してあるので、そちらを参考にさせていただきたい。

これらの発表後、自由討論となり、教職員、学生双方から沢山のご意見を頂いた。これらの討論の結果を簡単にまとめることは非常に難しいことであり、また誤解を招きやすいことでもあるが、おおむねその内容と問題点を列挙すると以下ようになる。最後に示した話題提供者の講演要旨と合わせて参考にさせていただきたい。

学生による授業評価については、個人的に実施している教員も多く、このこと自体に対して反対を唱える方は参加教職員、学生の中には居られなかったように思われる。しかしながら、大学が制度として組織的に実施することに対しては賛否両論が教職員、学生の双方から出された。その主なものを列挙すれば以下のようになる。

- a. 調査結果が人事管理に使われるのではないかとこの恐れがある。
- b. 教員側から見ると余り授業を真面目に受けていないと思われる学生の評価は受けたくない。また、参考となる意見はあまり得られないのではないか。
- c. 不真面目な学生を含んでの平均的評価結果が人事管理などに使われてしまうのは問題である。
- d. 学生による評価だけを取り上げるべきではない。教育活動全体の中での授業評価の位置付けをして貰いたい。
- e. 学生による授業評価を実施することが目的にな

ってはまずい。教育効果を上げることが目的であることを忘れないでほしい。

f. 調査実施に際し、無記名方式がよいとする学生が多かった。教員の側は記名、無記名両論といったところであり、記入に当たっての学生の責任感覚などが問題となった。

g. 教授法の評価を越え、教授の資質まで評価するのは問題である。

h. 授業評価の良否は教育設備・環境、学生数など教員個人の問題以外の影響も受けやすいことを見逃すべきではない。

i. 学生の中にも学生が果して正しく授業評価をできるかどうか疑問であるという意見を持つものもいた。

j. 学生は調査に真面目に対応している。

k. 学生の意見として、結果は教員自身の役に立てばよい。結果を学生に示す必要はない。

l. 人事管理に使わない組織で実施すべきである。

m. 教員自身の個別実施では客観性に欠け、大学としてのデータの蓄積とならない。

n. 次回のこのような会において授業評価の経験談などが聞けるようにしてもらいたい。

o. 全教員が教育効果を上げるべく努力すべきであり、一部の教員だけが努力するようではまずい。

以上のような意見、討論の後、最後に多留委員が纏めとして、教育は一方通行であってはならず、学生の希望や反応を取り入れること、教育の場を活性状態に保っておくこと、また学生との信頼関係の下で考えていくこと、などの必要性が述べられ、このような点から参加者の活性という意味で本会は意義があった旨の開会の挨拶があり、終了した。

4. おわりに

以上のようにフォーラムは活発な議論、意見交換の内に終了した。本稿を作成中、折しも自己評価委員会（小西睦男委員長）によって学生による授業評価に関するアンケート調査カードが作成され、各教員が自主的に調査し、授業改善に役立たせるための支援体制も出来たように思われる。今後、このようなフォーラムや教育年報などの場において、活発に各教員による調査結果の報告や授業改善に関するよい案などが提案されることが期待できる。

なお、このような会は、昭和58年に堤井教務委員長のときに数回開催（教育年報第1号に掲載）されて以来、最近としては初回といってもよいものであるにもかかわらず、十分な位置付けについての説明をせず、

昨今の話題性という点を重視して“授業改善と評価”という標題を選んだため、参加の皆様は唐突さを感じさせてしまった点もあり、討論の場でもお叱りを頂いたが、反省すべきところである。

そのため、授業間の内容の関連と調整の必要性、授業の在り方などの教育効果を挙げる上で当然考えなければならないことについて、話題提供者の講演を含め多くの意見が出されたが十分な議論をすることができなかった。今後もこのような意見交換の機会が設けられ、教員、学生双方とも気軽に意見を交わし、議論の輪を広げることができれば、一層の教育効果が挙がることが期待できる。

また、最後に今回は他の学内種々行事と重なるという不手際を生じさせ、参加できない教職員が多数おられたことに対して深くお詫びする次第である。

<学生による授業評価の事例発表、講演要旨>

学生による授業評価の実施例

機械工学科 萩原芳彦

学生による授業評価の実施に付いては議論の多い所である。ここでは、これまでに実施した方法と結果、問題点などについての要点を述べる。

1. これまでに実施してきた方法

実施日：原則として、各科目の授業最終日

実施方法：質問に対する回答を選択枝の中からマーク・カード方式によって回答させ、自由意見があれば回答カード裏に記入させる。記入は無記名

対象者：当日の授業出席者のみ

設問の種類：学生の状態（入学、成績、再履修などの区別）、教授法に対する意見、学生の勉学状態の3種類の設問を合計30問まで実施

回答結果の解析：情報処理センターにて処理する。各設問に対する単純整理のほか、成績上位者、再履修、推薦入学者など、項目ごとの分析も可能である。

2. 結果についての要点および感想

(機械工学科13教員で実施した場合を例として)

a. 学生の大半は真面目に回答している。多くの教員の回収結果の総集計(平均)と各教員自身の結果の比較ができる。講義初体験の教員の場合は毎回実施が

よいと思われるが、その他の教員は隔年、数年程度の間隔で参加しても十分参考になる。

b. 教員の授業に対する学生の意見の平均的なものとしては、

黒板の使い方についての不満が多い。

学生への接し方についてはおおむね良好である。

授業が難しいと感じている学生が多い。

c. 学生の学習状態

教科書、参考書所持率は高いとは言えない。

自分が成績上位と感じている学生は少ない。

普段自学自習しない学生が半分以上いる。

3. 制度として実施する場合の案

a. 各教員が授業時間内に実施、回収し、学科事務室などで集め、情報処理センターにて処理する。自由意見は、一部ではあるが、公表すると誤解を招くものもあるので他人が個人を特定できないシステムとし、個人情報秘密を守る必要がある。

b. 学生は無記名回答とする。大半の学生は真面目であり、よい意見がやすい。

c. 学科単位、学年単位などで全教員の平均結果を公表する。各教員には各自の結果を渡す。教員は個人結果を授業改善のほか、教育年報などで事例発表の際に積極的に活用し、たがいの教育技術向上に役立てる。

「電気回路理論および同演習」に関する授業方法の自己評価

電気電子工学科 海老原大樹

教育内容の質的向上と教育方法の向上を目的として電気回路理論、同演習では講義と一体化を目的とした演習書の作成とアンケート調査に基づく講義方法の自己評価を実施した。

アンケートは教員の教育方法の改善を目的とするところから、アンケート内容と同時に実施日の設定も重要であった。検討の結果、アンケートの実施日は前期末とした。この理由は、学生が担当教員の授業方法について自分で判断でき、かつ自分達がさらに受ける後期の授業の改良を本気に考えてもらうためである。

アンケートの設問は担当の教員4人で検討し、それぞれクラスごとに実施した。回答は無記名である。

アンケートの設問作成にあたり、その回答内容が教育方法にフィードバックがきかなければ意味がない。

そこで設問の作成には、できるだけ学生が回答しやすく、かつ教育方法の改善の応答のよい内容とした。平成4年度に実施した内容を本文末に示す。この設問中1~4, 9~11は単純に講義方法を質問し、5~8はやや考えての回答を求めた。また、12~15は学生の希望を質問した。

設問が理想的な講義方法をイメージすると、設問(1)~(4), (9)~(11)では教え方のテンポ(普通)、話し方(良い)、解説(良い)、授業態度(良い)、声(大きい)、ユーモア(ある)そしていやみが(ある)のが良いであろう。また、設問(2)~(4)における(普通)は、教師にとって満足すべきものではなく、もっと努力を必要とする項目と考えたほうが良い。

一方、設問(5)~(8)においては、創造性(あり)、知的触発(あり)学習目的の伝達(あり)、熱意(あり)が良いのはわかりきっているが、むしろ(わからない)の回答は否定的な回答と考えるべきである。

また、設問(12)~(14)ではテスト、宿題などの内容をチェックしているが、勉学の向上を目的とするには、その内容が学生のレベルをやや上回っているほうが教育効率がよいであろう。そのような観点からとらえると、テストなどは(もっとやさしく)が多いことが望ましい。

アンケートの配布および記入依頼は、平成4年7月に行った。本科目の全受講生は220名であったが、アンケートの回答者はこの内203名である。

教員4人(伊藤、曾禰、海老原、田口)の担当別に調査を行った結果、それぞれのクラスごとの特徴も現れているが、これらは各担当教員で確認しあい、以降の講義に修正を加えて行うこととしている。

個人別の回答結果から、教員それぞれ学生から見た傾向がわかるが、なかには教員自身が全く意識していない事柄を指摘された項目もある。

<授業改善および評価への意見と提言、講演要旨>

授業改善および評価への提言

経営工学科 富田久雄

(要点)

1. 授業は送り手と受けての双方で成り立つものだから、両者の間にアンマッチが生じる事は、通常は避け難い。このアンマッチを改善し、授業の効用を高め

るために、フィードバックとして、送り手と受けてのそれぞれの立場から授業の評価が行われるのは当然のことで、そのこと事態は是非を論じることではあるまい。

2. 授業は一つの技術でもあるから、授業を行うものの人格、能力とは別に技術の善し悪しを論ずることができる。これが、授業評価を行うに際しての割り切りであって、評価を人格や能力の側面にまで広げると、混乱が生じるから注意せねばならない。よく研究を行うものが、よき授業をするとは限らない。野球でいえば、名選手がただちに名コーチになるとは限らない。コーチには、コーチとしての技術が必要である。

3. 議論すべきことは、評価をどのように行い、その結果をどのように活用するかという実施にあたっての方策であろう。この場合に基本となることは、双方が協力によって授業の効用を高めたいという意欲をもってことあたれるような仕組みとすることで単に監視するもの、監視されるものという立場だけが強調されると、結果は空しいことになる。

4. したがって、授業評価は、あくまで教師と生徒という当事者の会話という形を主体として行うべきである。第3者が生徒の評価を持って教師の仕事の評価する、という色合いが前面に出ることは避けねばならない。第3者はあくまで事務処理に徹するという立場を越えてはならない。

5. フィードバックを効果的に行うために、マクロな善し悪し(好き嫌い)という指標ではなく、アンマッチの原因を技術的に分解できるように、できるだけ多面的、かつ具体的な観点で評価を行うべきである。

6. それぞれの授業は、決してスタンドアロンの性格ではないであろうから、評価の結果は、教育体系にもフィードバックされる場を設定すべきであろう。これは学科内の検討会の場を活用することができる。また設備の不備が問題となる場合があるから、この種の問題提起に答える全学的なバックアップ体制を作ることも必要であろう。

7. できれば授業技術について助言できる専門スタッフを置くことが望ましい。

授業改善と評価について感じていること

自然科学系物理 鳥山 保

1. 授業改善

3年間、物理学(1)(2)、物理学実験及び応用物理学を担当し、電気電子工学科の卒論生の指導をした際に感じたことは、

(1) 比較のおとなしい学生が多く、意欲を持って勉学に取り組んでいるなどと思える学生が少ない。

(2) 受講生のレベルに開きが大きく、徐々に易しくする方向にしてきたが、それでもまだ20%ぐらいの学生は授業の最終日に行っているアンケートで難しいと答えている。一方、そうすることによって一部成績のよい学生からは不満が出るかたちになっているのである。

(1) については、大学生生活で授業に興味を持ち、意欲的に勉強をしたという経験を学生に味合わせるチャンスを限られた時間でどの様に組み込むことができるのか?を考へつつ、次のように授業を徐々に変化させてきた。(必ずしも効果が上がったとは思えないが)

a. 小学生以来テスト、テストで評価されてきた現在の大学生にとっては、テストとその解答という形式のほうが納得がいくのではと思ひ、講義の中に演習的要素を増加させ、試験の解答説明をしてできるだけ具体性のある問題を多く取り入れる。

b. マンガや劇画を見て育ち、テレビからの情報が多く、文字を読んで理解するのが不得手なのではと思ひ、オーバーヘッドプロジェクターを使って、図を豊富にできるだけ具体性を持たすためにカラフルにする。

ところで、理工系離れ対策と考えられるが、最近のアメリカの物理の教科書も一変してカラフルで、図や写真が非常に多くなっている。そして、コンピュータ・ソフト付の教科書が増加する傾向にある。従って、この方向は誤っていないと思うので、これからはシュミレーションのような動的要素を取り入れ、だんだんコンピュータグラフィック化して行きたい。一方卒論指導の方は長時間かけて、より具体的な問題について輪講、実験及び解析、論文作成などで指導できるので、授業よりも指導しやすい。

(2) については、B方式や他の方式で入学してきた学生とA方式で一応受験勉強をしてそれなりのレベルを乗り越えてきた学生とどう調和させていくかという

問題にぶつかる。昔のように学生間で教え合うチャンスはずっと減っているし、学生にその意識も余裕もないように見えるので、数学、物理、化学いずれも最低マスターすべき要項を専門の先生方と協議して、少なくとも高校で習得していない学生に対しては別コースを用意する道を探る必要があるように思える(物理では平成6年度より、テスト的にスタートさせました)。

ところで余談ですが、数学、物理、化学の基礎科目の選択制の導入により3年、4年次の授業においても、1年生のうちに大学での基礎的な数学、物理、化学を習得していない学生にも、習得した学生と同じ様にいかにして同じレベルの専門的な知識を教え込むかという難しさが生じることは、間違いであろうと推察しています。

高度技術化・情報化が急速に進展し、技術革新の周期が短くなっている現在では益々数学、物理、化学の基礎学力が重要性を増していることや、基礎学力を身につけていないと就職試験、大学院試験、公務員試験などで困ることを考えると、少しでも学生の基礎学力の向上につながる授業を、専門の先生方と話し合いながら工夫して行きたいと思う。

2. 授業評価

さて主題の授業評価であるが、まだ経験のないことなので実感として捕らえ難いのですが、

a. 勉学に励む学生からの評価は授業レベルをあげるのに役立つと思えるので、進んで受けたい。

b. 余り授業の勉強はせず、自分の感想だけは主張する学生からの評価は授業のレベルを下げる方向に行くのでは。

というのが現在の偽らざる心境である。一昨年機械工学科の松本先生からいただいた資料(神戸大学 木村修三教授の経験談:アメリカのカレッジ教育の一断面、教育学術新聞第1648-1651号)を読ましていただき、そこに書いてある程度のアンケートであれば授業のレベルアップに役立つかと思ったりもした。

しかし、アメリカでは

a. テストの際に試験監督はいないで済む。

b. 単位取得についても相当厳しく、学生も勉強しないと卒業できない。

と聞いているので、導入に当たっては本学の教育環境をよく考慮して、その評価項目を決めて欲しいと考えている。そして、授業評価が本学において自己能力の向上に真摯に取り組んでいる学生の要望に答えられる方向で、活用されることを願っています。

授業改善および学生による教授法評価への意見と提言

人文社会 藤原洋二

○授業改善について：ビデオプログラムあるいは各種の教育機器を用いた授業の展開によって、授業効果が格段に向上する可能性は十分あると考えています。但し、これまでの小生の乏しい経験によれば、『1クラス当たりの学生数を減らす』という一見陳腐に見える方向を目指すことこそ簡便かつ即効性を持つ施策のように考えております。これまで1年生配当の授業を担当してきた経験によれば、本学の新生（大学生活の『悪弊』に染まった上級生ではありません！）のすくなくからぬ部分は大学における授業に殆ど全く関心を抱いていません。入学したばかりの最初の授業の際であっても、もしそのクラスが大人数であれば、担当教員が教壇に立った後でも常軌を逸したおしゃべりを止めない一群が存在することからもそれは明白です。こうした事態の沈静化に授業時間のいくらかでも割くなどと言うことは資源の浪費と言わざるをえません。あるいは、大教室の後半分に『着席』している学生の多くが各種の『作業』に従事している光景もありふれたものです。その結果、昨年までの小生担当の授業では30%近い単位未取得者を排出させるに至っております。「担当者の力量不足」という批判は甘受するところですが、それだけでは受講生が激減した本年度の前期試験における極めて良好なレコードは説明できないと考えております。『学生との問答』を授業の中心に据えている小生なりのスタイルも本年度はかなりスムーズだと実感しております。授業に積極的に取り組まざるをえない物理的な条件づけこそ問われているように思われます。

○学生による教授法評価について：結論から申し上げますれば、『学生による教授法評価制度の制定』には反対致します。『授業方法』の項目でも述べた通り、授業を無視していると言わざるをえない受講生が現実に存在しているからです。制度的に実施された場合には彼等とても受講生である以上評価作業に参加することになるでしょうが、彼等の手になる『アドバイス』から教員として得るところは少ないと考えております。いささか堅苦しい表現を用いれば、学生側の『教員及び授業内容を評価する資格』も同時に問われなくてはならないはずで、そうした観点から小生は学期末近く、受講生が最も少なくなる時期を選んで教授法評価アンケートを実施しております。というのも、これま

での乏しい経験によれば、こうした時期に出席している学生こそが最も熱心な受講生であると理解しているからです。彼等から時に投げ掛けられる批判には耳が痛いものも少なくありませんが、心して受け止めて行きたいと考えております。「教室を去って言った学生の声こそ聞くべきだ」という意見も存在するでしょうが、彼等は投票を棄権した有権者のような存在ですので、過大評価は禁物です。その意味でも、「単なるアリバイづくりのために授業に顔を出すということを認めない」ための具体的措置である『授業の少人数化』は、結果として実りある教授法評価を可能にするものだと考えております。

学生による授業評価について

土木工学科 屋谷 勝

◎ 私が考えている学生による授業採点は次のようなものです。

目的：教育効果向上に役立つ情報を学生側に求め、教員が次の機会には、得られたデータを授業の一層の向上のために反映させる。

方法：私も、皆様が考えているものと大体同じと思います。すなわち、各項目に反応できるアンケート形式の書式を採用し、最終授業において学生に無記名で記入してもらうというものです。

利点：

- (1) 教員に授業に対する緊張感と責任感を求めることができる。（手抜きが少なくなる）
- (2) 教員が想像していたような指摘があれば、必ず反省材料として次工程（次の機会）に役立つ。
- (3) 情報とは客観性を有して初めて価値があるものと思います。教員自身による個別実施は客観性に欠落し、大学のデータの蓄積にはならない。

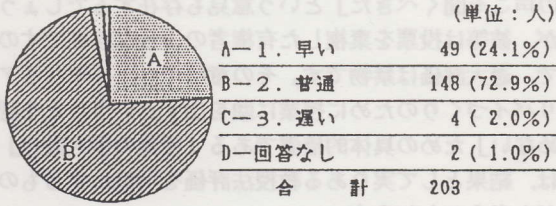
心配点：(1) 悪い評価に対して、大学が個別的に悪さをするのではないか。最も悪さとは何かにもよります。多くの教員が心配するのはこの点だと思います。しかし、大学として注意を言い渡すことは当然でしょうし、又、教員もそれに対して事情を説明する機会もあります。目的は「教育向上」に活用することですから、教育に対する努力目標ができれば、効果満点である。

(2) 学生の授業評価が学内で定着し、教員が安心できるまでの期間は、本人のみに結果を報告するだけでもよい。

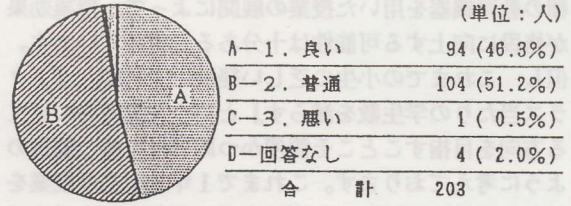
回路理論および同演習に対するアンケート結果 (海老原大樹)

調査人数 203名

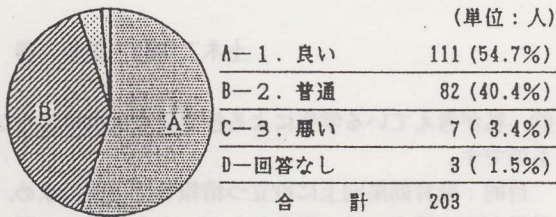
1. 教え方のテンポ



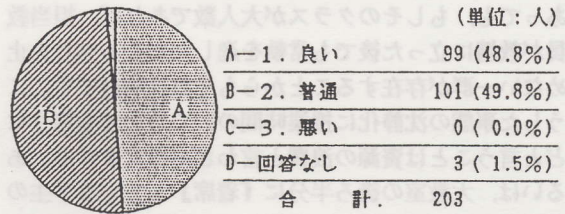
2. 話し方



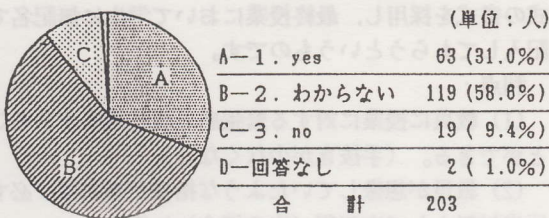
3. 解説



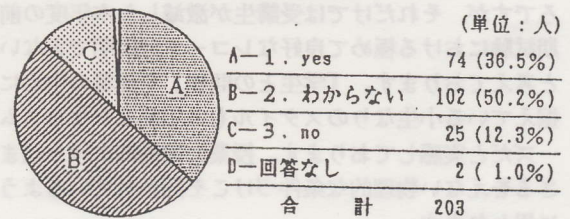
4. 授業態度



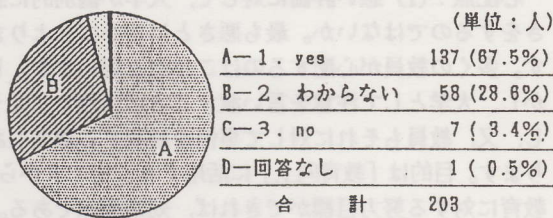
5. 創造性



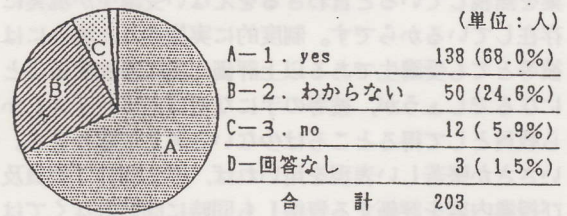
6. 知的触発



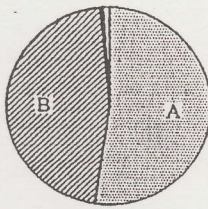
7. 学習の目的



8. 準備と熱意



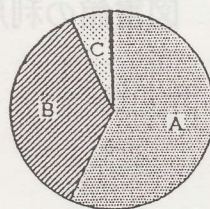
9. 声



(単位：人)

A-1. 大きい	106 (52.2%)
B-1. 普通	94 (48.3%)
C-3. 小さい	1 (0.5%)
D-回答なし	2 (1.0%)
合計	203

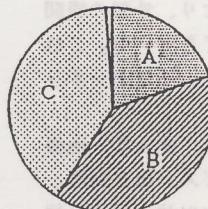
10. ユーモア



(単位：人)

A-1. ある	116 (57.1%)
B-1. 普通	74 (36.5%)
C-3. ない	12 (5.9%)
D-回答なし	1 (0.5%)
合計	203

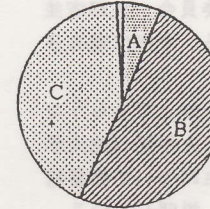
11. いやみ



(単位：人)

A-1. ある	40 (19.7%)
B-2. 普通	80 (39.4%)
C-3. ない	81 (39.9%)
D-回答なし	2 (1.0%)
合計	203

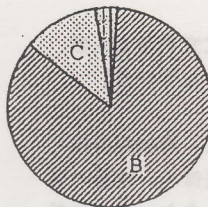
12. 宿題



(単位：人)

A-1. たくさんが良	12 (5.9%)
B-2. 少し	103 (50.7%)
C-3. ないほうが	86 (42.4%)
D-回答なし	2 (1.0%)
合計	203

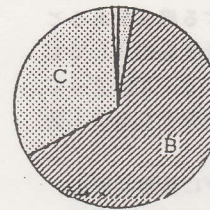
13. 小テスト



(単位：人)

A-1. 高度に	2 (1.0%)
B-2. 現状で	172 (84.7%)
C-3. ないほうが	24 (11.8%)
D-回答なし	5 (2.5%)
合計	203

14. 中間テスト



(単位：人)

A-1. 難しく	5 (2.5%)
B-2. 現状で	131 (64.5%)
C-3. 易しく	65 (32.0%)
D-回答なし	2 (1.0%)
合計	203